

やさしい
囲碁史

囲碁で出世した明治の元勳

古作 登 (大阪商業大アミューズメント産業研究所主任研究員)

遊戯発祥の地、中国では囲碁は文人のたしなみとされ唐の時代には皇帝の相手をする囲碁の名手「棋待詔」(きたいしやう)という官職も設けられるほどだった。日本においても古くから知的階層や政治をつかさどる人々に囲碁は広まり、奈良時代の聖武天皇、吉備真備。平安時代の醍醐天皇、菅原道真。近世では徳川家康を筆頭に、戦国時代に活躍した多くの武将が碁に親しんだ。

260年あまり続いた江戸時代から明治時代に移る時代の変革期、囲碁をきっかけとして世に出た政治家がいた。大久保利通(1830~1878)がその一人である。

薩摩藩士として生まれた大久保は家格が低く貧しかったが勉学は優秀で、囲碁も十代の頃からかなりの打ち手だったという。薩摩藩は17世紀末、本因坊道策と琉球国の名手濱比嘉親雲上(はまひがべーちゃん)を江戸で対局させるなど、囲碁の外交における役割を評価していた。1858(安政5)年に新藩主となった島津茂久の父で藩の実権を握っていた島津久光は大の囲碁好き。大久保は久光の好敵手、乗願和尚に政策を進言する手紙を渡し、これをきっかけに久光に取り立てられ出世街道を駆け上っていった。

明治維新で激動の時代になると大久保は新政府の中心人物として参議、大蔵卿などの要職を歴任。激務の間も唯一の趣味である碁は打ち続けた。公家出身で王政復古にあたり大久保と協力、新政府の要職にあった岩倉具視(1825~1883)とは好敵手の間柄だった。

二人の対局を観戦していた同じ碁好きの大隈重信(1838~1922)は「大久保のほう少し上手だが、岩倉が対局中に大久保を怒らせ勝ちを得ることが多い」と記している。

やさしい
囲碁史

最古の棋書『忘憂清楽集』

古作 登 (大阪商業大アミューズメント産業研究所主任研究員)

囲碁は古代中国で生まれ、紀元前6世紀から5世紀にかけて活躍した孔子の言行録『論語』にも記述が残るように、知的階層の遊戯として親しまれ、さまざまな書物に登場する。しかし純粹に技術に関する書物が著されたのはかなり後のことである。

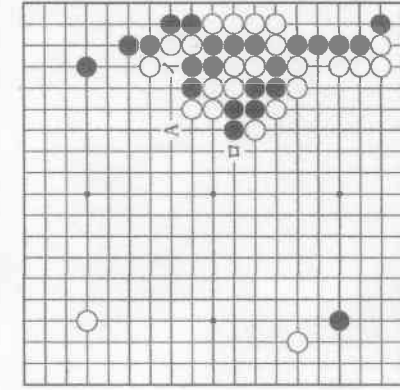
第21回

現存する最古の棋書は12世紀、宋代に著された『忘憂清楽集』。書名の由来は北宋の皇帝徽宗(1082~1135)の作った囲碁に関する漢詩で、冒頭の「忘憂清楽在枰棋」にちなんでいる。

内容は最高権力者の指示で編集されたばかりあり布石から戦い方、ヨセ、石の捨て方など囲碁理論、さらに棋譜、詰め碁と現在の囲碁辞典と比べても遜色のない充実したものだ。

図は本書に掲載されている手筋「一子解二征」で、唐代の囲碁の名手・王積薪が発見したとされる。Aの地点に黒が打つことで白と白口、二つの征(シチヨウ)を防いでいる。

ほかには三国志の時代(3世紀)に活躍した有名な武将たちが碁を好んだことも記されており、以前にこちらで紹介した呉の孫策と



呂範、さらには陸遜や諸葛瑾(蜀の軍師・諸葛亮の兄)といった名前が登場する。魏の基礎を築いたライバルの曹操もかなりの打ち手だったらしい。

原書は中国・北京図書館が所蔵しており、1983年には日本語版も出版されている。最古期の碁を知るためには必見の棋書であろう。